



俺の彼女が**魔法少女**になったせいで  
人生破滅した話

基本CG 11枚 差分・テキスト込 72枚

成人向作品

俺の彼女——山野由喜奈（やまの・ゆきな）は、非常に生真面目な性格だ。昔から今に至るまでずっと共に育ってきた、いわゆる幼馴染でなければ、俺のような劣等生が彼女の恋人になることなど出来なかっただろう。



この学園に入ってからしばらく経った辺りで、何となく付き合いつつ始まることになったが、別段、俺たちの関係に変化はない。彼女が俺にベタベタと甘えたり、甘えさせてくれるようなことは一切なく、常にこちらの尻を叩くかのようになんて接してくる。彼女というよりむしろ、母親か姉みみたいだ。

「ユキナ、ごめん！ 今日の授業も全然分かんなかったから  
教えて欲しいんだけど……この後、また家に行っていいか？」  
「はあ？ あの程度も分からなかったの？ もう、本当に  
仕方ないわね……委員会の仕事が終わってからで良い？」  
「も、勿論です！ ユキナ様マジ女神！」  
「何よそれ、ホントに調子の良い奴ね……」  
まあ、情けない彼氏の面倒見るのも仕事のうちよ」



「じゃあ、その……面倒を見るついでに……」  
「あ、キスは駄目よ？ 二人つきりになるからって調子に  
乗ったコトしたら、本当に怒るわよ？」  
「頑な過ぎるよ、ユキナ……」  
「他の男よりマシとはいえ、○○の感覚がおかしいのよ。  
ちゃんと結婚するまでは、お互いに清い関係を保つの。  
当然のことでしょう？」  
「はあ……」

——と、そんな感じで、未だに俺は、この子にセックス  
どころかキスすらさせてもらえない。  
彼女は、その手の行為を強く嫌悪しており、性的な行いは  
「計画的に、必要時に、仕方なく、最小限で行うもの」  
だと捉えている。



無論、俺だって嫌がるユキナと無理にでもそういう行為に  
及びたいわけではないから、拒否されたら素直に引き下がる。  
でも、こんな魅力的な身体、彼女が居たら、セックスして  
みたくなるのが男の性だ。  
まあ、「その時」を楽しみに、気長に待つしかないか。

ユキナはその性格に反して肉感的なボディの持ち主で、  
他の男子生徒や教師に、下卑た目で見られることが多い。  
それで彼女は、強く男性を嫌悪するようになっていたが、  
俺だけは「これも特別扱いしてくれてるんだ」だか、  
そんな彼女を悲しませるようなことはしたくない。

夜。勉強会を終えたあと、帰宅する俺にユキナはわざわざ付き合ってくれた。こっとういう、何だかんだ優しく、彼女も「一緒に居たい」と思ってくれているところが、俺は好きで仕方がないのだ。



結局のところ、この子の笑顔は俺だけのものなんだよな。それが分かれば、厳しく当たられたり、キスやセックスをさせてくれないのも余裕で我慢出来てしまう。

俺はこんな彼女を持てた幸せを噛み締めつつも、二人で夜道を歩いた。

しかし、その時、俺たちの平和な日常を終わらせる異変が起きた。

突如として空間が裂け、向こう側から緑の肌をした怪物が出現したのだ。この現象、実際に見たのは初めてだが、聞いたことがある。まさか――

「う、うそでしょ……魔獣……!?」

魔獣――この世界を侵略すべく異世界から現れ、その圧倒的な力によって男を殺し、女は孕み袋にするといい化する。それらに対抗出来る者は「魔法少女」と呼ばれる存在しか居ない。



「い、いや……に、逃げなきゃ……!」

狼狽える俺とユキナ。彼女の手を引いてやりたかったが、情けないことに俺も、恐怖で足が竦んでいた。

「来てそうそう、美味そうな良い雌が居るじゃねえか。そっちの雄をフチ殺したら早速遊んでやるからな」

緑色の魔獣がユキナを下衆の目で見ろ。俺たちは終わりを覚悟した――が。

「この私が、そうはさせませんよぉ〜!」

「な、何だ貴様はあああ〜〜!」

「魔法少女あいり、参上です! えへっ♡」

「異様な光景だった。魔法少女一だと名乗った卑猥な格好の女は、魔法か何かで魔獣を押し倒した後、その上に跨ってセックスを始めたのだ。異常なのはそれだけじゃない。その名を知らぬ者は居ない、魔法少女あいり」と言えは、三年前にこの街の人々を多くの魔獣から救いながらも、ある目を境に失踪した、英雄的魔法少女だ。



「あ、あなたが……あの魔法少女あいり……なの!?」  
「お話は後です♡♡とりあえず、サクツと魔獣さんをイカせちゃいますので♡」



「なんっ♡んっ♡はあぁっ♡えいつ♡えいつ♡もういきそう♡  
もつとサコサコおちんほ鍛えないと駄目ですよお♡」  
「し、搾り取られるっ…魔法少女あいり、何故ここに…!」  
「サコちんほ魔獣はせいせいでマジカルおまんこでぴゅっぴゅ  
させられて消えちゃってくださいいね♡」  
「ぐおおあっ、気持ち良すぎるっ……!」



魔獣は魔法少女あいらの膣内で絶頂すると、生気を失ったように脱力し、やがて消失していった。

「も、どうしようもないクソサコちんちゃいたね〜。あ、お怪我はありませんか？ 魔法で治しちゃいますけど」

「だ、大丈夫……それより、あなた……魔法少女あいらって本物なの？ 私、すつとあなたに憧れていて……」

「俺もだ。だから、魔獣にさらわれたんじゃないかって心配してたんだけど……無事、なのか？ もしや、偽物……」

「私は真正正銘、この街を守っていた魔法少女あいらです。昔、一度魔族に負けちゃいました、魔界で囚われてたんですけど、何とか逃げ出せました」



「それは本当に良かった……んだけど、その……さっきの魔獣との……いわゆる、破廉恥な行為は必要なの？ 普通に倒せないの？ それに何だか格好もその……」

「そうだ……確かにあいりちゃんは今元々エロくて、男にとつては性的な意味でも憧れだったけど……今はもっとエロくなくなったような……」

「はあ!? そんな目で、正義感に燃える魔法少女あいらを見てたの!? 最低、これだから男って嫌いよ」

「彼氏も友達も居ない私の前で痴話喧嘩しないで下さいよお」

「うっ……なんか、ごめんなさい……」

とはいえ正直、仕方がないだろ。  
あいつりちゃんは以前からメチャクチャに卑猥だったのだ。  
当時から既に大きかった乳房を丸出しにして……  
恥ずかしそうにインタビユーに應える姿がたまらなく  
エロくて……恐らく、多くの男性のオカスになつてきた  
のだろう。

そして、三年の時間を経て成長した今では、更にエロさを  
に磨きがかかっている。



突然、魔獣とセックスし始めたことも相俟って、三年の間  
に何か変化があつたのだろうか。魔獣や魔法少女の存在を認知  
してはいや、そもそも俺たちは、魔獣や魔法少女の存在を認知  
全く聞いたことがなかつた。魔獣と戦うのかは  
もしや——

「……で、さっきの質問にお答えしますが、セックスは必要なことなんです。魔法少女は自らの身体で魔獣を絶頂させることで、彼らを倒すことが出来るんです。逆に、こつちが絶頂させられちゃうと、魔力の奪取や改造の隙を与えることになって、負けちゃういますけど」

「嘘でしょ……魔法少女は、そんな卑猥なことをして街を守ってくれていたの……? あまりにも辛すぎるわ……」

「そこで提案なんですけどお。由喜奈ちゃん、実はあなたにも魔法少女の適性があるんです。私の為だと思って、一緒に戦ってはくれませんか?」

「え、ユキナが……魔法少女?」



「私が……!? でも、私に出来るのかしら。性的な行為なんてしたことがないし……ねえ、それって絶対しなきゃ駄目なの? もっとこう、魔法攻撃とかじゃ駄目?」

「駄目なんです。ちゃんとエッチしない。私も元々はエッチなんて無縁な人間でしたが、仕方なく頑張ってきたお陰で出来るようになったりしました。あなたにもやれます!」

「そう……よね……普通、セックスなんて嫌に決まってるわよね。それをあなたはすつと頑張ってきたんだから、命を救われた恩をそれで返せるなら……私も頑張るわ!」

こうして俺の彼女は、なし崩しの魔法少女になった。  
正直、自分の彼女があんな風に魔獣とセックスするのは  
我慢ならなかった。我ながら憧れの魔法少女の苦勞を知った以上、ユキナの  
だが、憧れの魔法少女の苦勞を知った以上、ユキナの  
生真面目な性格的に、止めても間かないだろう。  
俺はどうすべきか迷いつつも結局何もせず、  
に魔力を分け与えられるユキナを眺めていた。 あいりちゃん



「ま、魔法少女ゆきな……変身……って何よこれ！  
ちよつと破廉恥過ぎるんだけど！ は、恥ずかしい……。  
〇〇、何がツツポーズしてるのよ！ こつち見ないで！」  
魔法少女最高！  
彼女が魔法少女になってくれて良かった！



「おお、無事に变身出来ましたね。ユキナちゃん、本当に  
エツチな身体してますね♥これは間違いなく逸材……。  
さ、これから一緒に特訓しましょうね」

「特訓って、何を……」  
「当然、エツチなことです。私達は先にイカされると  
負けちゃいますから、おちんちんに慣れておかないと」

こうして、ユキナとあいりちゃんの特訓の日々が始まった。  
この時はまだ、ユキナが魔法少女になったことを強く後悔  
することになるとは考えてもみなかった――

「どうしてこんなことに……」  
「俺はユキナやあいりちゃんと共に、学園の校舎裏に来ていた。」  
「実のところ、あいりちゃんの正体は、不登校であった同級生の「中田愛依利（なかつたあいり）」であつた。彼女とはともなくピツチであることで知られ、毎日学校をサボっては男漁りを楽しんでいると噂されてきた。」「三年間、魔獣に囚われていた筈じゃ？」と疑問に思つて訊いたが、どうやら、度々抜け出しては再び連れ戻されて……といったことを繰り返していたとか。」



「さて。今日はたくさん男子に来てもらいました。ユキナちゃんにはまずおちんちんを口で気持ち良くしてあげて、慣れていきましようね」

「あいり。本当にやるの……？ ○○とするのじゃ駄目？」

「好きな人とのエッチじゃ練習にならないので。あなたを嫌う。」「その他大勢の愚かな男共」としなないと意味無いです。ほら、これも街を守る為だと思つてください」

「う、うう……仕方ないわね」



「あゝクソ真面目なああのユキナ委員長を便所に出れるなんて。ちよつどあいりちゃんパコリ飽きてたんだよね」

俺のユキナにペニスを啜えさせているのは、学園の女子を釣っては孕ませまくっている、下衆の不良男。

「はあ：はあ：知ってるよほきゅ：誰にでもやらせるクソビッチ中田愛依の正体が、あの魔法少女あいりなんだよね？」

まさか憧れのあいりちゃんが、おちんぼしやぶつてくれるなんて……」  
一方であいりちゃんにしゃぶってもらっているのは、学園中の女子からその外見と振る舞いと臭いで嫌悪されている、魔法少女を偏愛してやまないオタクだ。



「んぽっ♡ぢゅぽっぢゅるるっぢゅぽっ♡んっぢゅるるっ♡  
（キモオタさんチンカスいっぱい溜め込んだじゃって可愛いです♡）

「んっ…んぐっ♡ぐぽお♡おごっおおおっ♡んぢゅるるっ♡  
（この不良男っ…こんな汚いもの啜えさせて喜んで、最低っ！）

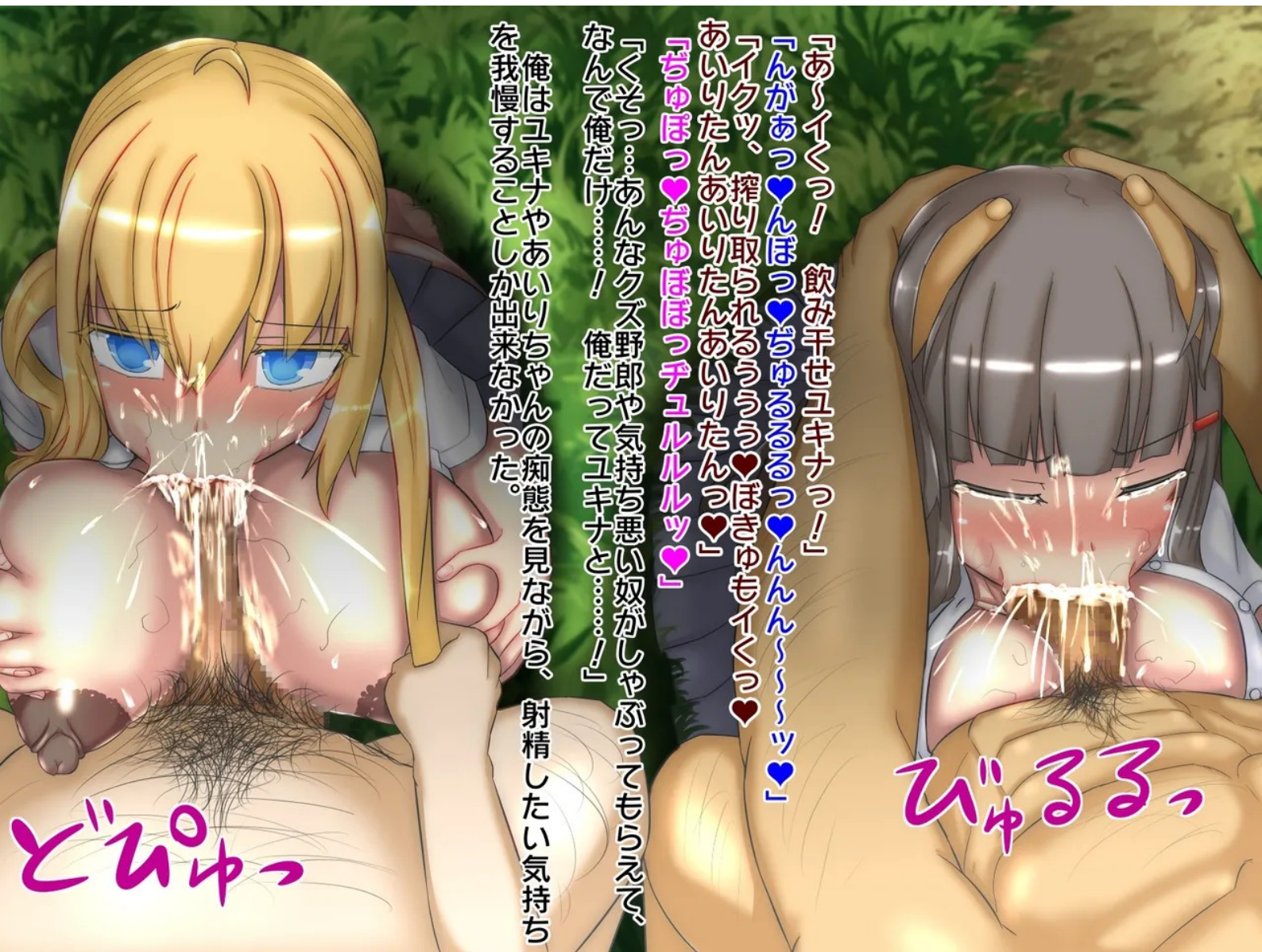


チュルッ♡

ちゅる♡

んぽっ♡

「おらもつとガンガンしゃぶれユキナ! あゝお前良いわ。俺の  
彼女になれよ。毎日パンコってガキ仕込んでやるから」  
「あゝゝ気持ち良いよおお♡♡あいらんっあいらんっ  
ほきゆのお嫁さんになつて♡♡なれっ嫁になれえっ♡♡」



「あ〜イクっ！ 飲み干せユキナっ！」

「んがあっ♥んぼっ♥ぢゆるるるっ♥んんん〜っ♥」

「イクッ、搾り取られるううう♥ぼきゅもイクっ♥  
あいらたんあいらたんあいらたん♥」

「ぢゅぼっ♥ぢゅぼぼっチュルルッ♥」

「くそっ…あんなクス野郎や気持ち悪い奴がしゃぶっってもらえて、  
なんで俺だけ…!! 俺だってユキナと…!!」

俺はユキナやあいらちやんの痴態を見ながら、射精したい気持ちを我慢することしか出来なかった。

どひゅっ

ひゅるるっ

後目。  
俺とユキナはあいりちゃんに呼び出され、夜の街に出た。  
「じゃあ、今日は早速おまんこして、処女を喪ってもらい  
ますね♥ 私の外国人さんの友達は凄いデカチンなので、  
その……頑張つて下さいね、ユキナちゃん」  
「ねえ、本当にこれ、やらなきゃ駄目なの？」



「当然ですっ！ おちんぼに慣れておかないと負けちゃう  
んですよ？ 良いんですか、魔獣さん達の出産奴隷にされて」  
「ぞ、それは嫌だけど……」  
「手伝つてくれるですよ？ じゃあ頑張つて下さい。  
さ、ホテル行きましょう。○○さん、ちゃんとビデオカメラ  
持ってききましたか？」  
「あ、ああ……全く、どうしてこんなことを彼氏の俺が……」



「やあ…怖い…は、初めてなの……」  
 「ほら、力抜いて！ まだ入れただけだよ！」  
 「遠慮なくぶっ壊しちゃって良いですよ♪」  
 「分かったよ……じゃあ動くね、ユキナ」  
 「ええアイリ、この子、大丈夫かい？」

はー  
 いやっ  
 はあ

「クソっ……何で俺は彼女が犯されるのこを撮影しなきゃならぬんだよ……畜生！」

「恥ずかしさに耐えるのも訓練のうちはです。見ても増えねえわね♪」

「あー、ちやん、何もしないで……！ 独りよがりな君は、耐えてくださいよ。辛いのは君がユキナなのだから泣きな」

「そう、いいことです。あんまり余程に恵まれてますね」

どくっ

どくっ

ちゅぷ

ちゅぷ



「痛っ、痛いッ! いやあ……こんな  
いやあ……〇〇が見てるのに……」  
「あゝ締めつけ凄いやっ♡  
最高だよ、可愛いよ♡」  
「ぐすっ……うれぢくない  
……〇〇にあげたかった  
初めてなのに……」



「い、いやあっ♡♡  
嫌いなっ♡♡  
激しくしないで♡♡  
処女を壊さないで♡♡  
彼氏のうちんぽ♡」



「あゝもうイクよっ、  
ユキナ、お前もイけ！」

ユキナの様子をニヤニヤ  
しながらかしいるあいり  
ちゃんが、  
何がおかしんだ？力を  
君に感謝してあげよう、  
申し出た俺さん、  
いんないに。苦しんで  
うんないに。

あ〜っ  
あ〜っ  
アッ  
ハッ

どくっ

どくっ

ハッ  
ハッ

それから数時間後、  
ユキナは放男は何度も  
こどもは女を犯した。度  
何度も彼女を犯した。度  
この地獄は、夜が明ける  
までの連続した。

また別の目。  
今度は公園に呼び出された。  
「……あいりちゃん、今回は何をさせる気だ？」  
「女の子に飢えた浮浪者さん専用トイレになって頂きます。  
最近抜いてあげてないから皆溜まってると思いますよお♡」  
「あいり……あなた一体、普段どんな生活してるの？」

「こっちの世界に来てからずっと、色んな男性のおちんぽ  
を気持ち良くして差し上げてますよ。訓練ですから♡」

「うう……最低だけど、仕方ないわ……」

「分かってくれて感謝です。さあ、変身してください」

「え、何故？ 変身する必要ってあるの？」



「な、何よこれっ！ か、身体が便器に……く、臭いッ……！」



「ちやんと便器になり切る為に、魔法で手脚を封印させて  
頂きました♥ユキナちゃんや撮影してる○○さんが耐えられ  
なくなっても困るので。  
ほら、一晩たったら解放しますし私も付き合いますから、  
一緒に浮浪者さん達のトイレ、頑張りましょうね♥」  
「こ、こんなの幾らなんでも、魔法少女のやることじゃ……！！  
狂ってる……あいいり、ねえお願い、こんなの止めて！」



「泣き言言ってないで下さい。浮浪者さん達来ましたよ」

「んっ…浮浪者様方、どうか淫乱魔法小便器で気持ち良く排泄して下さいませ♥」

「何だあ？ 魔法少女様がワシらのちんぽを扱いてくれるってか。じゃあ遠慮なく使わせてもらおうかのう」

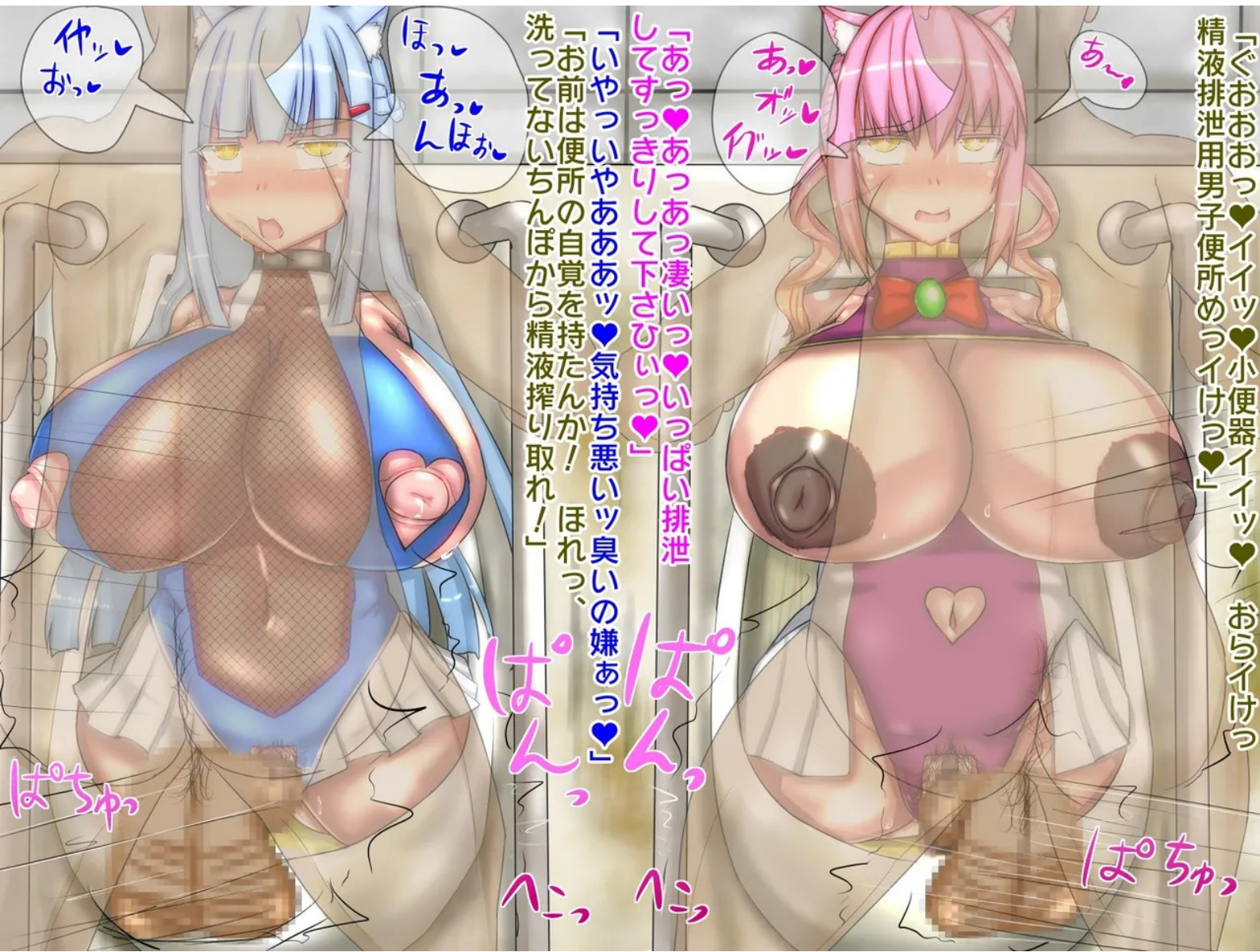


「あ、あなた達っ！ やめなさい、こんなの…せ、セックスなら妻とすれば良いでしょう!？」

「ごっちの小便器は生意気じゃのう。ワシらに妻なんぞ居る訳がなからう。それともお前を便所妻にして良いってことか？」

「お、お断りですよ♥ごっちの子も遠慮なく使用して下さい!」





やっ  
おっ

ほっ  
あっ  
んほん

あっ  
おっ  
やっ

あっ

「あっ♡あっ♡あっ♡凄いつ♡いつぱい排泄  
してすっきりして下さひいつ♡」  
「いやっいやああ♡♡気持ち悪い♡臭いの嫌あっ♡」  
「お前は便所の自覚を持たんか！ ほれっ、  
洗ってないちんぽから精液搾り取れ！」

はちゅ  
ぱん  
へっ へっ

「ぐおおおっ♡イイツ♡小便秘イイツ♡  
精液排泄用男子便所めっイけっ♡」  
おらイけっ

はちゅ



いっ

しゅんちゃんほ  
でイクっ

どがららっ

「くださいいい浮浪者の性病種汁ううう」  
「ワシもっ射精るツツ」  
「いやああ出さないでえ！  
いやあああッ」  
浮浪者射精でイクの嫌っ

びゅる



イクっ

ふんちゃん  
でイクっ

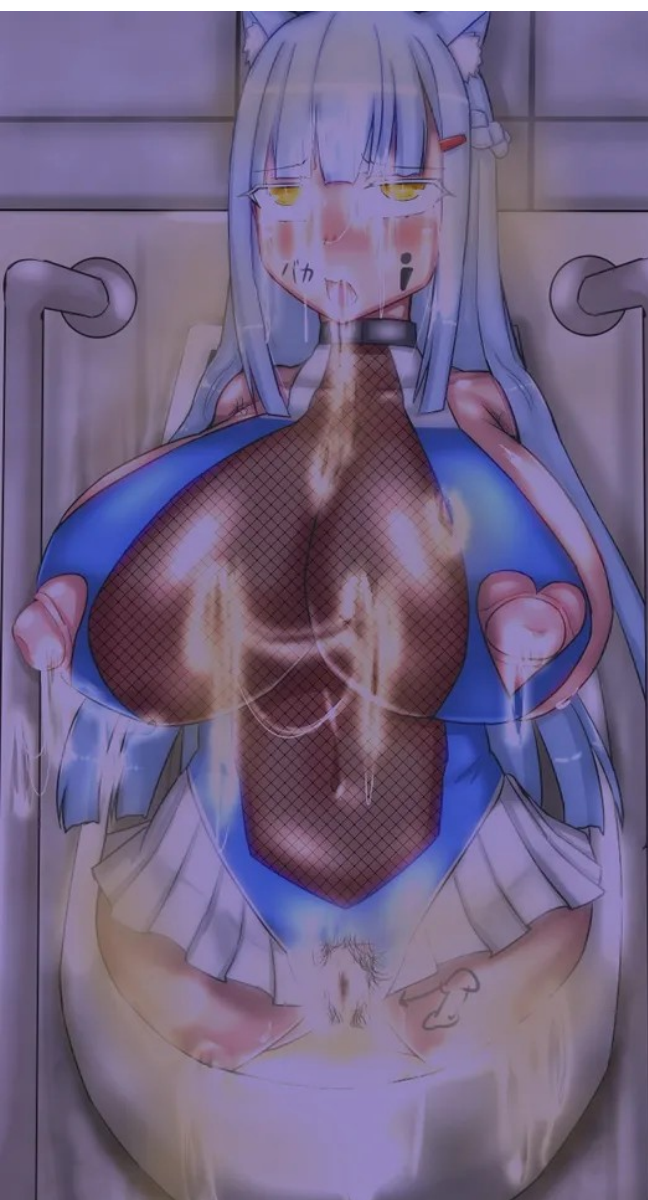
どがららっ

びゅる

「うおおおっもうイクっいっちまうううう」

数時間後。  
ユキナとあいりちゃんは便器として汚され尽くし、酷い悪臭を漂わせながら白目を向いていた。

「くそっ、こんなこと、本当に必要なのかよ……」



更に別の目。  
俺たちはあいらりちゃんの部屋に呼び出された。

俺もユキナも、また先目のようなるくでもない目に遭わせられるのではないかと警戒してはいた。  
だが、その目の「訓練」は、俺たちの予想を上回るおぞまじさであった。

あいらりちゃんの傍らには、小柄な化物が居たのだ。

「ユキナちゃん。今日はよいよ魔獣とのセックス訓練です」

「ま、魔獣とするなんて、そんな……！ ねえあいらり、その気持ち悪いのは何……!？」

「酷いですねえ。この子は私が産んだ息子の一人ですよ♡」

「息子……!? 魔獣が女の子をさらって妊娠させるとは聞いてたけど……なんで「真つ当な親子です」みたいな面してるんだ……」

「魔獣でも大事な子供ですから♡」

さて。うっかりユキナちゃんから先♡  
ように言っておりましてから心配は要りませんけど、ちゃんと気持ち良くくしてあげてくださいね♡

あ、勿論、この子が射精してくださいますよ♡

「お、おぞまし過ぎるわよ……ねえ、あなた、本当にあの

英雄なの!? 魔獣を憎み、街を守った正義の魔法少女あいらり……なのよね……?」

「ずっとそう言ってるじゃないですかあ。」

ほら、早くラブラブセックスさせてあげてください。  
ほら、ユキナちゃんとセックスしたくておつきくしていますよ♡」



「良いですよ～ぼくちゃん♥  
ユキナちゃんていっぱいヌコヌコ  
しましょうね～♥  
ほらユキナちゃん、可愛い魔獣さん  
ですよ。ぎゅってしてあげて下さい♥」

「ママ、モウ、コイツニブチ込シテ良イ？  
早くブチ込ミタイツ！！ チンポ入レタイ！！」

「い、いやっ…何コイツ…気持ち  
悪すぎるわよ……！！」



「も～、ぼくちゃんに酷いこと言わないで下さいねえ？  
流石の私でも、ちょっと怒っちゃったかも。  
あんまりこんなことしたくなかったけど、軽く  
催眠魔法を使っちゃおうかなあ♥」

「ママ、コイツ、嫌ガツテル……  
デモチンポ入レタイ！」

「さ、催眠……何を言ってるの……」

「もうっばんばん頑張って腰振っちゃってえ♥  
ぼくちゃんそんなにユキナちゃんのオマシコが良いんですかあ?♥  
ママ、ぼくちゃんに良いお嫁さんが出来て嬉しいッ♥  
ママの肉お布団に包まれながらおちんぽしましょうね~♥  
ほらユキナちゃん、うちの息子のこと喜ばせてあげて下さい♥」

へこっへこっ

ばちゅん  
へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ

「キモチイイツ♥コイツイイツ、ママ、コイツ  
気持チイヨオオツ♥嫁ニスルツ♥  
ママ、コイツ嫁ニシタイツ♥」

「あっ♥んっ♥もうっ♥駄目えっ♥」  
(何よ、こいつッ♥一生懸命腰振ってえ♥  
私どうしちやったの♥ 凄く可愛く思えちゃう♥  
可愛いッお嫁さんにあってあげたい♥  
赤ちゃん産んであげたいッ♥)

あっ♥んっ♥  
あっ♥んっ♥  
あっ♥んっ♥  
あっ♥んっ♥

へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ  
へこっ





びゅっ

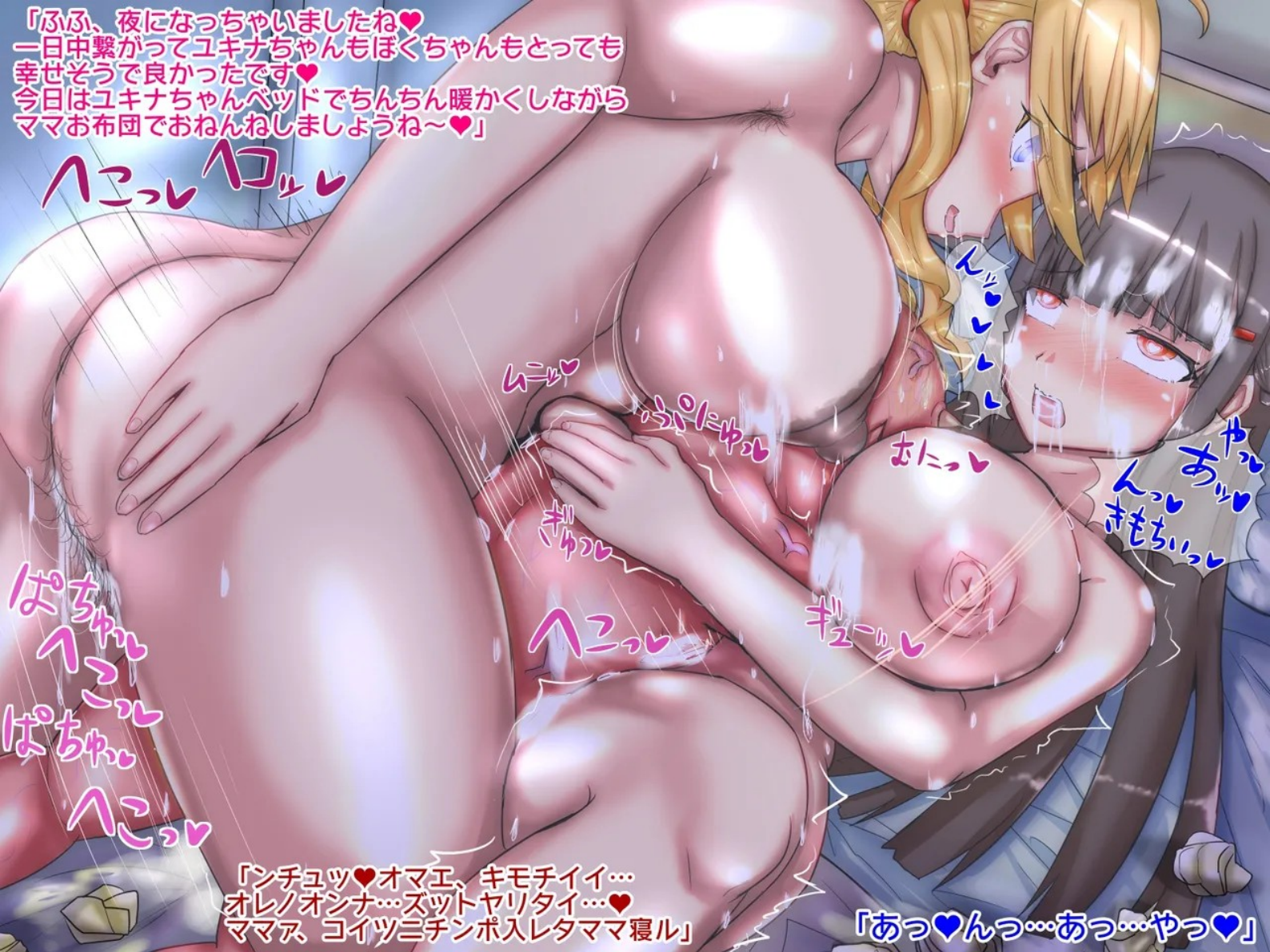
「イクッ♥オマンコイクッ♥  
イクウウウウ~~~~♥」

「ほら、良いのよ♥ お姉ちゃんの膣内で  
びゅーってして♥お姉ちゃんもイクからああ♥」

イクッ

かっ  
スッキ

「ふふ、夜になっちゃいましたね♥  
一日中繋がってユキナちゃんもぼくちゃんもとっても  
幸せそう良かったです♥  
今日はユキナちゃんベッドでちんちん暖かくしながら  
ママお布団でおねんねしましょうね〜♥」



へこっ へこっ

ぱちゅん  
へこっ  
ぱちゅん  
へこっ

ふにゅ  
ふにゅ

へこっ

ふにゅ

ふにゅ

あっ♥んっ...  
あっ...やっ♥

「んちゅっ♥オマエ、キモチイイ...  
オレノオンナ...ズットヤリタイ...♥  
ママア、コイツニチンポ入レタママ寝ル」

「あっ♥んっ...あっ...やっ♥」

後日、何事も無かったかのように学園に来ていたあいいりちゃんに、ユキナが詰め寄った。  
敬愛する魔法少女であるあいいりちゃん相手とはいえ、とうとう我慢の限界が来たらしい。  
「あいいり、私、もう耐えられないわ。○○の目の前でいやらしい下衆男達や魔獣の慰み者になって……昨日なんて、私に魔法で何かしたでしょう!？」



「だって、私の子供のことを悪く言ったから……それに催淫魔法は魔獣も使うことがあるので、ちゃんと訓練としての意味も……」  
「ごめんなさい。正直、付き合いきれないわ。出来れば、英雄であるあなたと一緒に魔獣と戦いたかったけれど……」  
「む、そうですか……残念です……」  
「それでは、もう訓練は終わりにします。ごめんなさい」

「……良かったのか、ユキナ。そりゃ、俺もお前があんな目に遭うのはもう見たくないけど」

「良くないけれど、仕方ないじゃない。あんな汚いこと続けるのは無理よ」

言葉にはせずとも、ユキナが「もうあいりちゃんとは距離を置こう」と考えていることは明白だった。何となく申し訳無さを覚えながら、俺たちは道を歩く。



その時、空間が裂け、異世界への門が開いた。

「まさか、また魔獣!？」

「そんな……いえ、今の私ならばきつと、自分の力で何とか出来る筈! あんな下品な訓練を重ねなくたって魔獣を倒せることを証明してやるわ! 見てて、○○!」

「分かった、どうか頑張ってくれ……!」

「貴様、新しい魔法少女だな？ ちようど良い、新しい  
孕み便器が欲しいと思つていたところだ！」

「あなた達のような薄汚い魔獣は、この私……魔法少女  
ユキナが退治してやるわ！ おぞましい下衆オスに生まれた  
ことを後悔しなさいッ！」



「下衆オス？ 雌の分際で随分と言つてくれるじゃねえか。  
これは『雌は男の便所でしかない』ってことをチンポで  
しつかり分からせてやらねえとなあ？」

「その考え自体が下衆だつて言つてるのよ。」

「ホントにオスつて〇〇以外、人も魔獣も最低な奴らしか  
居ないのね。もう何言つても無駄でしょうし、すぐに  
消してあげる……！」

「ええ、きつと私なら、こんなオスに負ける筈がないわ！」



「……ふええ？ な、なに!? こ、これ何……!?  
これが本当の魔獣のおちんちんだって言うの……!?」  
「何だあ？ もう怖気づいたのか？ すぐぶっ壊れるぞ  
つまんねえからちよつとは耐えるよ?」



「太いイイイ♥魔獣ちゃんぽ太しゆぎるううう♥こんにゃの  
聞いてない♥聞いてないわよお♥  
無理に勝てない♥人間ちゃんぽと全然違ううう♥」  
「おらおら、さっきの威勢はどうしたクソ雑魚魔法雌豚が！」



「膣内で射精するぞッ受け止めるッ! クソ雌イけっ!」  
「もうイクっイクイクイクイクイクイクイぎゅううう♡無理いいい  
こんなのかてにやひいい♡イクイク♡イツクウウウウ♡♡♡」

あゝ  
イグッ

あゝイクッ

ブルッ

ブルッ

とららら  
ドポッ

ビュルルッ

ユキナが絶頂すると、彼女は魔力を奪われたのか、気絶したように倒れ伏してしまった。

「くくそっ！ 助けなきや……何とかしないと……」

俺は完全に冷静さを失って、ユキナを救おうと魔獣に向かっただけ。魔法少女でなければ倒せない魔獣に、俺のような無力な人間がなにが出来る訳がなかった。

「何だ、オスか。死ぬ」

俺は魔獣の屈強な腕で殴り飛ばされ、死を覚悟する程の痛みと、恋人を救えない無力さに苦しみなから、気を失った。



「……ここは一体どこだ？俺は死ななかつたのか……？  
あ……あいらりちゃん？」

「ふふ、おはようございます、〇〇さん。傷は私が魔法で  
治しておきました」

「そうなのか、ありがとう……ああ、そうだ！  
俺の事はいいんだ、ユキナが魔獣に負けて攫われたんだ！  
あいらりちゃん、ユキナを助けてくれ！」

「え？嫌ですよ♪」

「……は？何を言ってるんだ、あいらり、ちゃん……」

「だって私、魔獣さん達のお嫁さんですから♡  
魔獣さん達の為に、『魔法少女』という上質な、新しい  
孕み袋を育成したかっただけなんです♪」



「嘘だろ……あ、あいらりちゃんが、魔獣の……嫁……？  
でもあの時、魔獣を倒してくれたじゃないか！」

「好みじゃなかったのだから殺しちゃいました♡」

「なんだよそれ、狂ってる……」

「あいらりちゃん……本当に、人間を裏切ったっていうのか！」

「私の期待を裏切ったのは人間共じゃないですかあゝ。  
友達も彼氏も作らず独りで頑張ってた私に、人間は何を  
してくれましたか？」

まさか『正義の心による無償の奉仕』だとも？  
私はただ承認欲求の充足を期待してやってただけなのに、

ム力つな口先では持ち上げるだけで、何もしてくれない。  
ム力つな口先では持ち上げるだけで、何もしてくれない。♡」

「そんなの……周りの人に相談すれば良かったじゃないか！」  
「セックスで魔獣倒してるけど正直辛いので慰めて下さい」  
「誰が聞くんですか、そんなの」

「そ、それは……きつと、誰か……」

「『誰か』って、どいつもこいつもそればかり。そんなだからもう人間には愛想尽かしちゃいましたよ。魔獣さん達は孕み袋としてとつても良くしてくれてるし必要としてくれているので、こっちの方が良いです♡」

「く、くそっ……ユキナを、俺の彼女を還せ！」

「嫌ですよ。彼女は一生この場所……魔界で出産奴隷として暮らすんです。悔しいでしょう？ えへへ、その顔が見たかったから、わざわざ生かしてあげたんです♡」



「絶対、ユキナを連れて元の世界に戻ってやる……！」

「元の世界にあなた達の居場所なんかありませんよ。まず、あなたの身体が壊れた部分は魔界の触手肉塊で無理やり修復しちゃいました♡ あなた、とつくに魔獣ですよ♡」

「へ……？ ええ？ い、嫌だ……そんなの……」

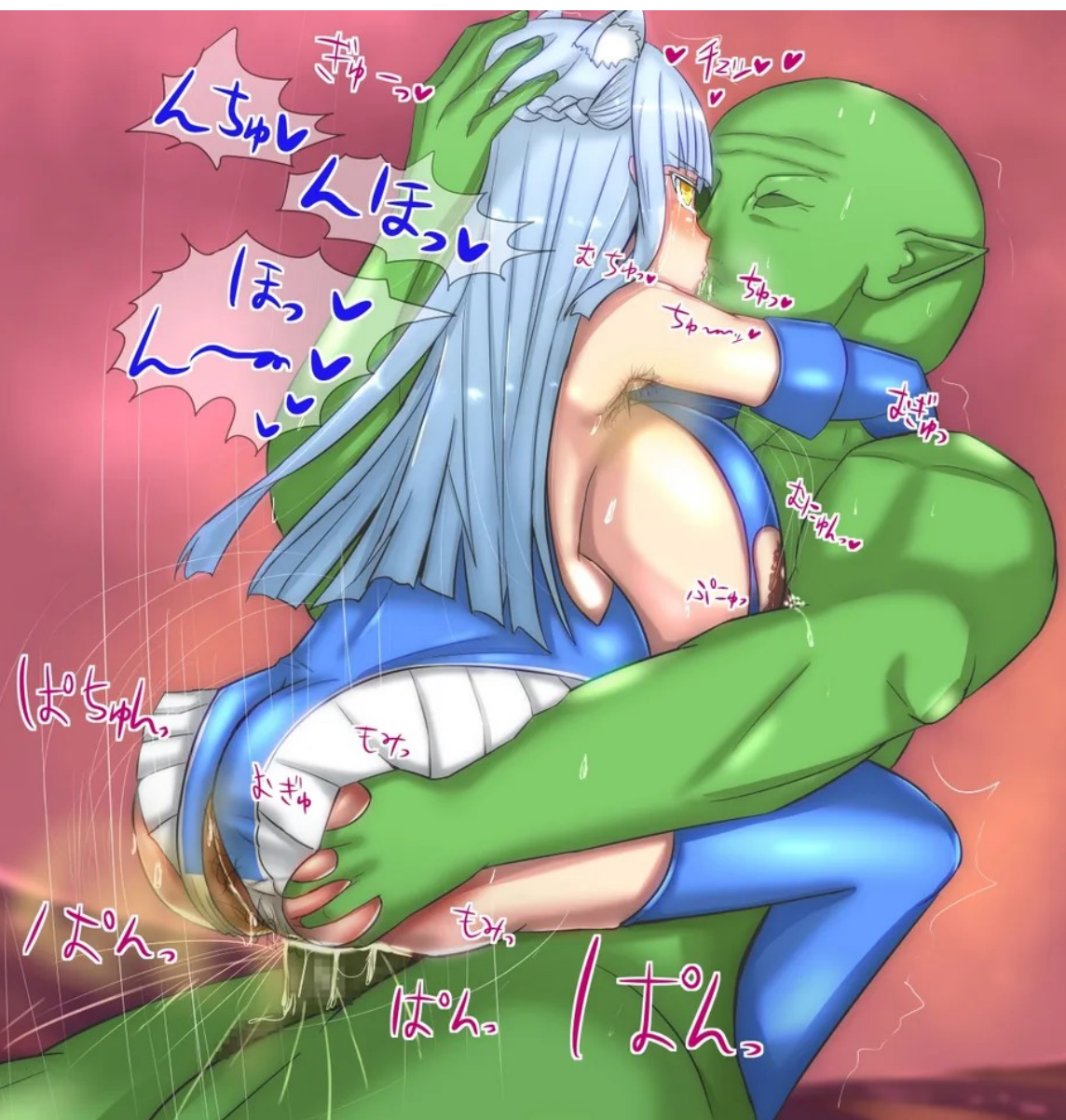
「ふふふ、それにユキナちゃんも。」

「ほら、あつちを見て下さい。ユキナちゃんのお腹。」

「え……あなたの彼女じゃなくて、立派な魔獣のお嫁さんです♡」

「え……ゆ、ユキナ……嫌だ……嫌だ嫌だいやだいやだいやだ」

「まけない……っ♡  
絶対魔獣ちゃんほに勝つてここを出てやる  
んだから……っ！  
そうよ由喜奈、○○のことを想うのっ！  
んほおつば、♡  
こんな薄汚い雄共のことなんて……  
「オラッ、オラッ！  
ぎやあぎやあうるさいぞポテ雌！  
黙って  
ンチュッ、しめるツツ！  
逆らうならその口塞いでやるっ！  
ンチュルツツ、  
ンチュルルツツ！」





「グオオツ！イグウウツ！腹のガキにゴクゴク飲ませてやる！」



ビュルルルルッ

ド  
ビュッ

んちゅっ

イクッ

イギゅうう  
ううっ

「んぢゅっ♥ちゅっちゅ♥んはあっ♥らめえいぎゅっ♥  
魔獣ざーめんでいきゅっ♥お腹に魔獣赤ちゃん居るのに  
射精でいくう~~~~~♥」

「○○さん、一度負けた魔法少女はあなっちゃうんですよ。何度交尾しても絶対頂して魔力を強制的に胎見育成に転化されちゃいます。だから魔獣と魔法少女の赤ちゃんつて物凄いです。成長するんですよ。♥」  
「肉自体もどんだん魔獣好みに変質していつちやいます♥」



「もう、助からないのか？ ユキナは……俺のユキナは……」

「だから、人間の雑魚オスのあなたのものじゃないですって。ユキナちゃんには既に私と同じ……毎日精液をたくさん求めずには居られない身体になっちゃってます。残念でしたあ♥」

「ユキナ……ユキナ、ユキナ、ユキナあ……」

「ふふふ、幸せそうな男女が破滅するのって最高過ぎてイっちゃう。♥」  
「結婚を夢見てたんでしょ？」  
「結婚まで処女を取っておこうと誓ってたんでしょ？」  
「ねえねえ、ねえねえねえねえどーなんですかあ♥♥♥」

無<sup>く</sup>それ<sup>から</sup>ど<sup>れ</sup>だ<sup>け</sup>経<sup>つ</sup>た<sup>の</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>か</sup>。も<sup>は</sup>や<sup>時</sup>間<sup>の</sup>感<sup>覚</sup>が  
あ<sup>い</sup>り<sup>つ</sup>ま<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>る<sup>。</sup>再<sup>生</sup>さ<sup>せ</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>俺</sup>は<sup>、</sup>身<sup>体</sup>の<sup>自</sup>由<sup>を</sup>  
完<sup>全</sup>に<sup>彼</sup>女<sup>に</sup>奪<sup>わ</sup>れ<sup>て</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>、</sup>絶<sup>頂</sup>と<sup>妊</sup>娠<sup>と</sup>出<sup>産</sup>を<sup>繰</sup>り<sup>返</sup>す  
ユ<sup>キ</sup>ナ<sup>を</sup>眺<sup>め</sup>続<sup>け</sup>る<sup>羽</sup>目<sup>に</sup>な<sup>っ</sup>た<sup>。</sup>  
俺<sup>の</sup>身<sup>体</sup>は<sup>完</sup>全<sup>に</sup>触<sup>手</sup>と<sup>一</sup>体<sup>化</sup>し<sup>た</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>が、</sup>そ<sup>の</sup>お<sup>陰</sup>で  
彼<sup>女</sup>に<sup>気</sup>づ<sup>か</sup>れ<sup>な</sup>い<sup>こ</sup>と<sup>だ</sup>け<sup>は</sup>救<sup>い</sup>だ<sup>つ</sup>た<sup>。</sup>

—その<sup>苦</sup>な<sup>の</sup>に<sup>。</sup>  
い<sup>や、</sup>だ<sup>か</sup>ら<sup>こ</sup>と<sup>ぞ、</sup>あ<sup>い</sup>つ<sup>は</sup>「<sup>そ</sup>う<sup>す</sup>る<sup>」</sup>の<sup>だ</sup>。

「<sup>う</sup>ん、<sup>も</sup>つ<sup>と</sup>ユ<sup>キ</sup>ナ<sup>ち</sup>や<sup>ん</sup>の<sup>可</sup>哀<sup>想</sup>な<sup>反</sup>応<sup>が</sup>見<sup>え</sup>ます<sup>。</sup>  
そ<sup>う</sup>だ<sup>、</sup>〇<sup>〇</sup>さん<sup>の</sup>肉<sup>体</sup>、少<sup>し</sup>だ<sup>け</sup>元<sup>に</sup>戻<sup>っ</sup>て<sup>あ</sup>げ<sup>ま</sup>い<sup>け</sup>う<sup>。</sup>  
全<sup>部</sup>は<sup>も</sup>う<sup>無</sup>理<sup>で</sup>す<sup>け</sup>ど<sup>、</sup>……え<sup>え</sup>と<sup>、</sup>こ<sup>ん</sup>な<sup>感</sup>じ<sup>を</sup>し<sup>て</sup>い<sup>け</sup>う<sup>。</sup>  
私<sup>、</sup>し<sup>よ</sup>ぼ<sup>い</sup>チ<sup>ン</sup>ポ<sup>か</sup>持<sup>っ</sup>て<sup>な</sup>い<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>よ<sup>ね、</sup>……」  
か<sup>ら、</sup>あ<sup>ん</sup>ま<sup>り</sup>ち<sup>や</sup>ん<sup>と</sup>覚<sup>え</sup>て<sup>な</sup>い<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>よ<sup>ね、</sup>……」





「……え？ ねえ、もしかして○○……なの？」

「ユキナ！ 絶対に助けるからな！ 何とか、元の姿に……」

「む、無理よ！ もう私のことは良いから……お願い、もう忘れて……私を見ないで……」

「それこそ無理だ！ どんな姿になってもお前は俺の彼女だ」

「○○、私だってあなたが好きよ。でも、どうしようも……」

「おいゴチャゴチャうるせえぞ！ 今のお前は魔獣の雌だ！

夫にしっぴかり奉仕しろ、おらっ！」



あゝ♡  
あん♡  
やあん♡

ぱん、ぱん、  
ずっぱ  
スツュッ

「おらっおらっ！ ガキさっさと産めッ！  
ガキはここか！ へへっ、三匹も詰まってやがる！  
早く全部胎から出して俺のサーメンで孕めえッ！」  
「あっ♡あん♡♡やめなさいよっ♡この最低よっ♡  
おちゃんぽで赤ちゃんイジめるなんて♡あ、あなた達の  
赤ちゃんなのにつ♡」





様々な種類の魔獣に犯され、その子供を  
生み出したユキナ。その時に行われた交尾は非常に  
中々、その時に行われた交尾は非常に  
醜いものであった。



「もー、駄目ですよ。イヤイヤ  
交尾したら牛さんが可哀想です。  
そんな悪いユキナちゃんには催眠  
魔法使っちゃいます！」

「いやっ……家畜と交尾  
のになんて……〇〇が見てる  
のになんて……ごめんなさい……  
私ほこんなこと嫌で、でも  
身体が言うことを聞かないの」





「モーン♡腰振り止まん♡オツ♡」  
な駄目♡牛の夫が嫌なことに♡  
人間の大好き♡彼が見てる♡  
人の牛の妻♡あなた♡  
嫌陣痛♡来たら♡牛の♡  
産んじやう♡う♡う♡の♡

ドクユ♡  
ドクユ♡

モーン♡

モーン♡  
モーン♡

「ユキッ♡チビ♡ちよつと催眠して♡」  
あけた♡喜ばそう♡一生懸命♡  
牛さん♡旦那様♡に♡  
頑張って♡

ドクユ♡  
バクユ♡

アヒル♡  
アヒル♡

アヒル♡

アヒル♡



「ぶっひいひい♥ぶひ  
フツギイ♥フヒフヒイ♥」

「もお〜♥  
んもっ♥もオオ♥」

モ〜♥

モ〜♥  
モ〜♥

アキ〜♥  
アヒ〜♥

豚

アヒ〜♥

ドチユ〜♥  
ドチユ〜♥

ドチユ〜♥  
バチユ〜♥

アヒ〜♥



「豚しゃまの赤ちゃん  
うまれりゆううう♡♡♡♡」

「う、産まれるツ牛の仔  
産まれる♡♡♡♡」

数日後――





「オオオツツ♡♡♡♡♡  
おきよ♡♡♡♡♡」

「おきよ♡♡♡♡♡♡♡♡」

その後ユキナは肉体はともかく、精神的には気丈さを保ちながらも、様々な魔獣に陵辱されていった。そして、しばらく経ったある日。

「さて、そろそろ仕上がりましたかね〜♪」

「お前、何をするつもりだ!？」

「ユキナちゃんを、お嫁さん兼肉おもちゃとして私の息子にあげるんです。その為に調教してましたからね、この魔界の王との間に産んだ子なので、とってても正しいんですよ♥」

「お願いだ……俺のことはどうでもいいから、せめてあいつの事だけは救ってやってくれ……!」



「え〜……どうでもいい人のお願いなんて、聞くわけないじゃないですかあ。あなたは魔獣と融合させられてお嫁さんになつた元・彼女を見て、オナニ〜も出来なくなつた身体で苦しみ続けるんですよ、えへへ♥」

「ゆ、融合……一体何を言ってるんだ!」

「文字通りの意味です。女の子は一生、つがいとなる男性に付き従うべきなんですよ♥ それでこそ仲良し夫婦ですよね……だから、身体をくっつけちゃいます♥」

「は……? 身体をくっつけるって……!」

「ゆ、ユキナ！ 何だよ、その姿……」  
「ねえ……○○、なんで私のことを忘れてくれないのよ。何もしてくれないなら、せめてそれくらいしなさいよ……！」  
「し、仕方ないだろ！ でも、今でも好きだから……ずっと好きだから、あ、諦めないで——」

「私は嫌いよ、いつも口ばっかりで！ ○○なんて大嫌い！ あなたが忘れてくれないなら、私があなたなんていう役立たずの希望、忘れてしまおうっ……！」

「え、嘘、だろ……ユキナがそんな酷いこと言うわけ——」

「イツマデモ喋ッテイルナ。動クヅ、雌！」

「ええ、めちやくちゃに犯してッ♥ あなたあ♥」



「おぎよっ♡ほぎよおおっ♡私で気持ち良くなってくれてるのね♡うれしっ♡オナホ妻うれしい♡もう人間も○○も知らないっ♡私は旦那様専用ちゃんぽ抜き出産妻よっ♡」

「ふぎやっ♡ほごおおおっ♡ぢぬっぢぬうっうっ♡」  
「気持ち良イッ♡俺専用オナホ妻気持ち良イイイ♡」

ほぎッ♡

ちゅっ♡

ぺちゅ♡

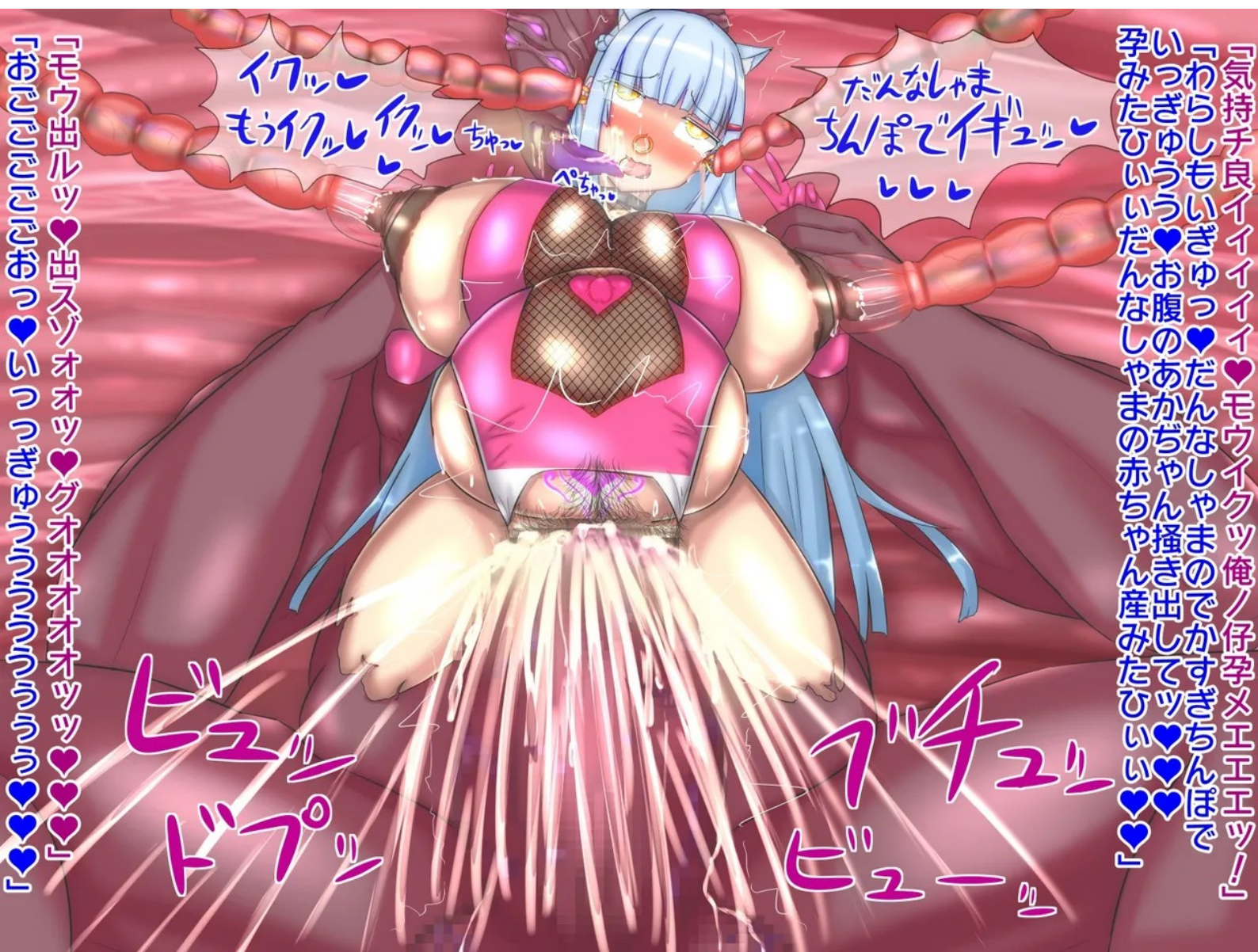
おぎッ♡  
あぎッ♡

はごっ♡

ズグッ

ズチュ





「気持チ良イイイイイイイイ♥モウイクツ俺ノ仔孕メエエツッ!  
「わらしもいぎゆっ♥だんやしやまのでかすぎちんぽで  
いつぎゆうう♥お腹のあかぢやん掻き出してツ♥♥  
孕みたひいいだんやしやまの赤ぢやん産みたひいい♥♥」

たんなしやま  
ちんぽでイキユッ  
レレレ

イクッ  
もうイクッ  
イクッ  
ちゅっ  
ぺちゅっ

ビュッ  
ドゴッ

グッ  
チユッ  
ビュッ

「モウ出ルツ♥出スゾオオツ♥グオオオオツ♥♥♥  
「おはっおはっおはっ♥いっっおはっおはっおはっ♥♥♥」

「ゆ、ユキナ……一体、どうしたんだ……なあ」  
「はあ……ふああ……♥ あなただれえ？」

「は……？ おい、冗談はやめろよ！  
俺は○○、お前の彼氏だろ！」

「知らないわよ、私の旦那様はこの人なの♥」  
「マダ足りナイ！ ブチ込ム！ マンコ犯ス！」

「ふざけるなよ……魔獣だか何だか知らないが、  
こんな酷いことをして許されると—— ユキナに

「何ダ、コノ、ギヤアギヤアウルサイ肉塊ハ？」

「知らないわ♥ 夫婦の交尾の邪魔よ、殺してちょうだい♥」

「嘘だよな、ユキナ！ お前がそんなこと言うわけないんだ。

なあ、ユキナ、お願いだ、助けてくれよ、そいつを止めてくれよ、なあユキナ、助けて、助けて助けて助けて助けてタスケテタ



「あゝあ。○○さん、殺されちゃいましたか。かわいそお♪ 夫婦の営みの邪魔をするからあ♡

……さて、ユキナちゃんも幸せにしてあげることが出来ましたし、私もちゃんと「結婚」しないとうつ。いつまでも色んな男性と交尾して出産する雌豚で居る訳にもいきませんからね。

結婚して、いっぱい子ども作って、愚かな人間共を支配してやりましょう！

男性の方は全員殺すか餌にして、女性の方には魔獣ちゃんほの素晴らしさを教え込んで魔獣孕み袋になつてもらいましょうか♡」





「数日後。愛依利は異形の「夫」と共に、魔獣の軍勢の現世侵略に参加していた。  
「な、なによあの化物！女の子が……！」  
「あいつ、魔獣を産んでやがる！」  
「馬鹿、見てないで逃げろっ食い殺されちまう！」  
「いやっ……怖い、気持ち悪いッ！」

「見てえ、人間の皆さん見て下さいぶひい♥  
魔法少女あいりは、ようやく愛しの旦那様を見つけて結ばれましたたぶひい♥  
一生の愛を誓って、離れ離れにならないよう融合しましたブヒイ♥」

「もう誰とでもするの止めてこの方だけの赤ちゃんを産み続けるぶひい♥  
この魔物様はあいがちんぽ漁りをしなくて良いよう、24時間この  
巨大おちんぽで激しく愛してくださるぶひい♥  
皆祝ってくださいさひい♥  
魔物の夫と幸せになった魔法少女を祝ってえ♥」



「ああん動く度にズポズポってなって気持ち良いでしゅううう♡♡♡ こんなに気持ち良いのに人間どもを滅ぼすのに貢献出来るなんて幸せですううう♡♡♡」

「な、なあ……あれ、『魔法少女あいら』って言うってたけど……」  
「馬鹿、あいらちゃんがあんな風になる訳ねえだろ！ 良いからさっさと逃げ……」  
クソツ虫どもがまとわり付いてきて……やめろ、喰うな、やめろ、やめろおおツ！



バビィ♡  
プギィ♡

ちゅぽ

ちゅぽ

ヌキョ  
ズパイッ

ずちゅ



魔獣の大規模な侵攻によって街は支配され、男は食事に、女は出産奴隷にされた。他の魔法少女達が魔獣の排除を試みたが、圧倒的物量によって敗北させられ、新たな孕み袋を増やすだけの結果に終わった。

おわり













































